

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

門第3000名! 近代日本の礎を築いた緒方洪庵 ～大阪が生んだ知の結晶・適塾～

緒方洪庵が弘化2年(1845)に過書町の商家を購入して開いた「適塾」(国史跡・重要文化財)。のちに慶応義塾を創立する10代目塾長・福沢諭吉は『福翁自伝』の中で「江戸にいた書生がおりふし大坂に来て学ぶ者はあつたけれども、大坂からわざわざ江戸に学びに行くものはない。いけばすなわち教えるというほうであつた」と大坂・適塾は、江戸を凌駕する日本最大の知の殿堂だったと述懐しています。洪庵と塾生たちゆかりの地を訪ねながら、その偉業に迫ります。



八重夫人

医師・億川百記の娘です。文政5年(1822)に生まれ、天保9年(1838)に洪庵と結婚。7男6女(うち4人は早世)をもうけました。瓦町時代、洪庵が病に伏せると八重は自分の帯を2両で売り、そのお金で桶を買って洪庵を湯浴みで回復させたといひます。適塾が繁昌すると「書生相増し多人数の由、三度の仕出しにぎやかなる事」(父への手紙)と台所の切り盛りだけでも大変でしたが、甲斐甲斐しく塾生たちをお世話し、「私のお母さん」(諭吉)「門生を持つに誠切なること子の如し」(佐野常民。日本赤十字社初代総裁・伯爵)と深く感謝されました。洪庵没後は夫の肖像画を毎日拝んで遺児の養育に尽くし、次男をオランダ、三男をロシア、五男をフランス留学させています。明治19年(1886)、65歳で没。その葬儀には出世して政経界の名士となった門下生1000人以上が参列し、今橋宅から日本橋まで行列が並んだといひます。墓は龍海寺で洪庵と寄り添うように眠っています。

1 除痘館発祥の碑

江戸時代に死病として恐れられていた天然痘(洪庵も8歳時に天然痘にかかっています)。その予防としてジェンナーが開発した痘苗が嘉永2年(1849)に長崎にもたらされると、洪庵は早速入手。同年、古手町(現・道修町)に除痘館を開設しました。種痘は人間の腕で培養しても7日しか効力が持たず、人から人へと種痘を植え継ぐ必要がありました。ところが「種痘を受けるに牛になる」と悪評が立ち、洪庵は時には金子を払って患者を都合したといひます。「辛苦艱難せること敢て筆頭の尽す所にあらず」(『除痘館記録』)ほど苦労しましたが、やがて効用が実証され、安政5年(1858)には官許となりました。その後、全国各地に分苗所を設立して、わが国の天然痘根絶の先鞭を担いました。同年、洪庵は最新の蘭医学書を翻訳して『虎狼痢治準』を出版。天然痘以上の恐怖だったコレラ治療にも偉大な業績を残しています。

2 御霊(ごりょう)神社

諭吉と塾生たちは御霊神社の祭礼で大失敗したことがあります。若衆が灯笼を頭にしてヤイヤイと行列するのを見て、諭吉が酒に酔った勢いで灯笼を打ち落しました。すると「その連中の奴と見える。チボじゃチボじゃと怒鳴り出した。大阪でチボ(スリ)といえば、理非を分たすぢ殺して川に投り込む習わしだから、私は本当に怖かった。何でも逃げるに若かずと覚悟をして、はだしになって堂島の方に逃げた」(『福翁自伝』)…結局、諭吉は中津藩屋敷に隠れて、ようやく命拾いをしたといひます。血気盛んでイタズラ好きだった塾生たちの姿が彷彿とするエピソードです。

3 懷徳堂跡(1724～1869)

豪商たちの共同出資で設立。武士、公家といった権威に囚われない自由闊達な学問所で有名でしたが、それは適塾も同じでした。諭吉は「大阪はまるで町人の世界で、何も武家というものはない。緒方の書生が幾年勉強してなにほどエライ学者になっても、頓と実際の仕事に縁がない」と書き、ではなぜ適塾で苦学したのか?といえは「西洋日進の書を読むことは日本国中の人にできないことだ。貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位」だったからとといひます。こうした「知」に対する大阪町人たちの、功利主義や出世主義を超えた、純粋無垢な飽くなき探究心が、綺羅星のごとく偉大な才能を数多く育み、近代日本の扉を開いたといえるでしょう。

8 大阪慶応義塾跡記念碑

明治6年(1873)11月、諭吉は大阪慶応義塾を開設。当時、慶応義塾は東京・三田にありましたが、西国から上京するのは容易ではないと分校を作ったわけです。はじめは安堂寺橋通3丁目の丸家善蔵の屋敷にあり、のちに当地の小寺篤兵衛屋敷(現・北浜二丁目)に移転。英書、訳書、洋算、和算などを教え、英書科75名、訳書科11名の計86名の生徒を育成しましたが、あまり生徒が集まらず、明治8年(1875)6月に惜しくも閉鎖されました。適塾は明治元年(1868)に閉塾していたので、もしかしたら諭吉は「恩師・洪庵が手がけた適塾を、もう一度、大阪の地に再興したい」という想いがあったのかも知れません。碑には諭吉の手による「独立自学」の文字が記されています。

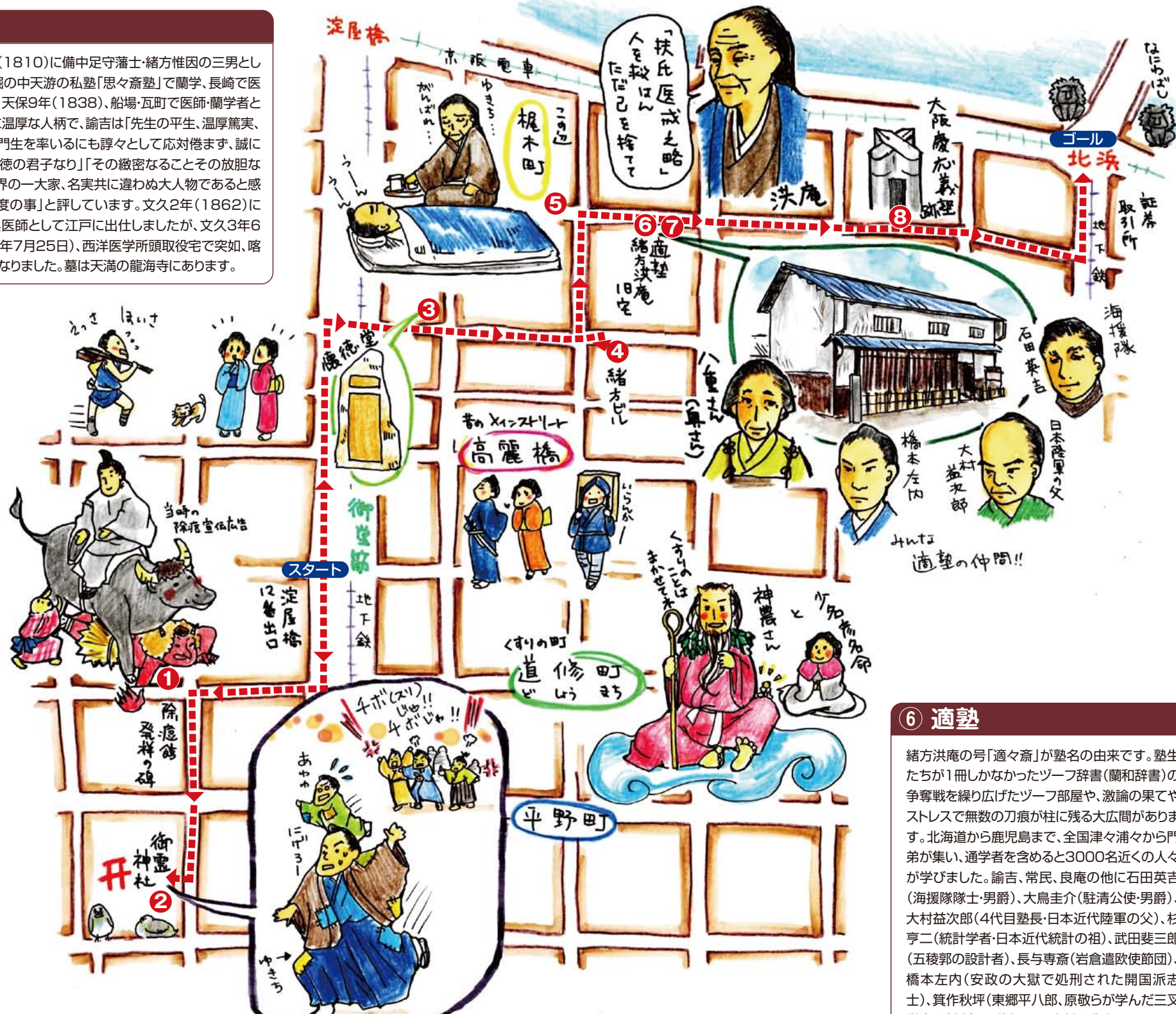
【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内)「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または [大阪あそ歩](#) でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。

緒方洪庵

洪庵は文化7年(1810)に備中足守藩士・緒方惟因の三男として誕生し、京町堀の中天游の私塾「思々齋塾」で蘭学、長崎で医学を学びました。天保9年(1838)、船場・瓦町で医師・蘭学者として開業。非常に温厚な人柄で、諭吉は「先生の平生、温厚篤実、客に接するにも門生を率いるにも諄々として應對倦まず、誠に類い稀れなる高德の君子なり」「その緻密なることその放胆なること実に蘭学界の一大家、名実共に違わぬ大人物である」と感心したことは毎度の事」と評しています。文久2年(1862)に幕府の要請で奥医師として江戸に出仕しましたが、文久3年6月11日(1863年7月25日)、西洋医学所頭取役宅で突如、咯血。54歳で亡くなりました。墓は天満の龍海寺にあります。



4 除痘館跡

万延元年(1860)に除痘館は尼崎町(現・今橋)に移転しました。現在は緒方ビルで、1階に適塾に学んだ曾祖父・良庵を主人公にした手塚治虫の漫画『陽だまりの樹』のパネルが展示されています。4階には「除痘館記念資料室」があります。

5 梶木町

安政3年(1856)、諭吉は難病の腸チフスで倒れ、洪庵が診察しました。洪庵は「おれはお前の病気をきつと診てやる。診てやるけれどもおれが自分で処方することはできない。何分にも迷うてしまう。この薬あの薬と迷うて、後になってそうでもなかったといってまた薬の加減をするというようなわけで、しまいにはなんの療治をしたか訳がわからぬようになるというのは人情の免れぬことであるから、病を診てやるが執匙はほかの医者に頼む」と言っ、洪庵自身は諭吉の容態を診察して友人の梶木町(現・北浜通)の医者・内藤数馬に薬を処方してもらい、見事に諭吉を治癒させました。諭吉は「緒方先生が私の病を見て、どうも薬を授くるに迷うというの、自分の家の子供を療治してやるに迷うと同じこと」「今にも忘れぬことのあるというのは、緒方先生の深切」と記しています。

7 緒方洪庵先生像

洪庵は和歌が趣味で、適塾や除痘館でも度々、歌会を開きました。また「小生江戸歌もあまり天狗になり、いつの間にかやめて、とんと忘れてしまい、元の木阿弥」という手紙があり、江戸歌を嗜んだ時期もあったようです。他にも囲碁を打つ、軍談を聞く、正月に酒で酩酊して午後の往診を休む…といった記録があり、非常に人間味溢れる人物でした。洪庵が医者への心構えを説いた「扶氏医戒之略」の中には「周く俗情に通ぜざるべからず」とあり、医者は庶民の好意を得ることが肝要だから世俗に通じて趣味を広げなさいと説いています。事実、洪庵は嘉永元年(1848)の医者番付で「大関」となり、大坂庶民が最も愛した名医でした。

6 適塾

緒方洪庵の号「通々斎」が塾名の由来です。塾生たちが1冊しかなかったツーフ辞書(蘭和辞書)の争奪戦を繰り広げたツーフ部屋や、激論の果てやストレスで無数の刀痕が柱に残る大広間があります。北海道から鹿児島まで、全国津々浦々から門弟が集い、通学者を含めると3000名近くの人々が学びました。諭吉、常民、良庵の他に石田英吉(海援隊隊士・男爵)、大鳥圭介(駐清公使・男爵)、大村益次郎(4代目塾長・日本近代陸軍の父)、杉亨二(統計学者・日本近代統計の祖)、武田斐三郎(五稜郭の設計者)、長与専斎(岩倉遣欧使節団)、橋本左内(安政の大獄で処刑された開国派志士)、箕作秋坪(東郷平八郎、原敬らが学んだ三叉学舎を創立)など錚々たる人材を輩出しました。